

集落を去る人を引き留める秘策とは？

● 支え合いマップで発見した一限界集落になっていくプロセス

■ 人は深刻な事態に陥っても、意外に深刻と思わないものだ

ある地区で支え合いマップづくりをした。ここは、いわゆる限界集落に限りなく近づいている。人がどのようにして地元を去っていくのか、その結果どのように限界集落になっていくのかが、人々の動きで見えてきた。

- ①子どもが仕事を求めて他地区に去っていく。
- ②残された親が一人暮らしになり、体が弱くなると、子どもに引き取られる。
- ③空き家になった家を子どもたちが時々掃除に来るが、その間に家は老朽化し、人は来なくなる。
- ④結婚の機会がなかった子どもたちは、やがて一人暮らし高齢者になり、その後は…
- ⑤子どもたちは去ったから、集落に子どもは生まれない。やがて1人もいなくなり、限界集落は

消滅集落へとひた走っていく。

この流れを何とか押し戻そうという努力がなされていないことが気になる。行政の出番以前に、住民の意思が見えてこないのだ。

過疎地域でマップづくりをすると、いつも感じるのだが、私たちは、いま自分たちが深刻な事態に陥っていても、そしてそれを知っていても、どうにかして変えようと真剣に反応するよりも、淡々とそれを受け入れてしまうということだ。

■ 限界集落を押しとどめるための行動方針

今回のマップ作りはインストラクター講座の実習として行ったため、受講生たちにこの地区の取り組み課題を出してもらって評価し合ったが、一方で私が考えた以下の取り組み課題案はすべて、限界集落を押しとどめるための行動方針のようなものだと考えてもらっていい。

(1)介護のために帰郷した子どもの就労場所を紹介

①介護のために帰郷したが、介護を終えて、ここを去る子どもがいた。この人に就労先を紹介すれば、残ってくれるのではないか。他の地区で、仕事をやめて親の介護で戻った息子を、地元の老人ホームが雇い入れたという事例がある。

②地元の公共・福祉機関は、介護帰郷をする子どもが働ける場を何人分か確保しておくことはできまいか。

(2) 子どもに引き取られた一人暮らしの親が5人。子どもの所に時々行く親も。逆に親元に子どもが時々里帰りしたり、住むことはできないか。

①子どもに引き取られた高齢者は、住み慣れた集落や家から離れて、幸せに生きられているのか。時々様子を見に行ったらどうか。

②そのような高齢者がときどき里帰りできるようにしたらどうか。そのための宿泊所を用意する。または空き家を整備しておく。

③子どもに引き取られた親がいずれ要介護になった時、子ども夫婦は介護ができるのか。そう考えたら、子どもが故郷に戻る方がいい場合もある。

④大切なのは、子どもの就労先を見つけられるかどうかだ。

(3)親元を去った子どもと近隣住民が協力して、親のお世話を。

①親が要援護になっても子どもが仕事の都合で親元に移り住めない場合、近隣住民と子どもが協力してその人のお世話をしたらどうか。

②子どもは近隣住民に親のお世話を頼む。その代わり週末などに帰郷して、できることをする。

(4)空き家になった家に、時々家族が戻って来ている（3軒）。地元の人には家の管理を受け持ち、代わりにその家をサロンなどに使わせてもらうことはできないか。

①そのような家族と日常的に交流していれば、地元に戻ろうという人も出てくるのではないか。

②この家を、たまに里帰りする親たちの宿泊所にもできる。

(5)空き家の掃除に来ている3軒のうちの1人は、地元の人と山菜取りに行っていた。ならば里帰りする人たちと地元の合同のレクリエーションをしたらどうか。

①親を引き取った子どもたちも、そこに招いたらどうか。

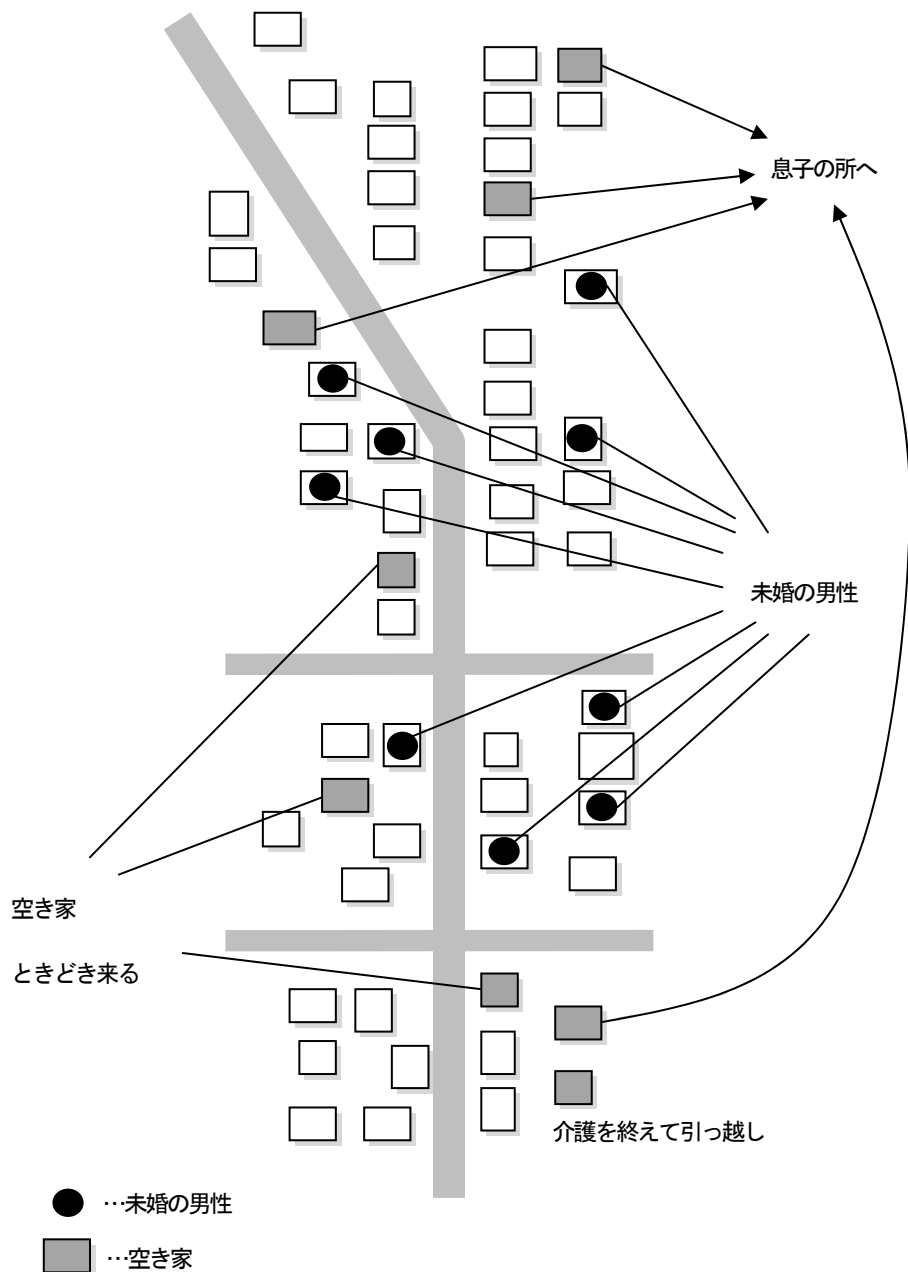
②山菜取りだけでなく、ここは釣りのできる川もあるようなので、釣り大会もできそうだ。

(6)独身男性（60～65歳）が9人もいた。仕事はしているが、地元との交流は少ない。彼らの夜の居場所として、スナックのような場はつukれないか。

①元飲み屋があるが、他にそれらしき店はない。

③他地区では、未婚の男性たちは夜にスナックに集まっていた。その人たちでママのファンクラブをつくっているというケースも。

②ボランティアたちで、夜の食事会またはサロンを開いて、実質的なスナックにするという方法もある。



社会問題はなぜ解決しないのか？

●先人の知恵に学ぼうとしない現代人

■例によって「専門家の配置」と「職員の研修」ですか？

最近、児童虐待事件が相次いで起こっている。さすがに新聞も、いかにも「あきれた」といった感じで記事を書いている。これだけ頻発するということは、対策のあり方が間違っているからだろう。そこに目が向かないのはどうしたことか。

その対策と言えば、より高度な専門家を児童相談所に配置する。職員の研修を強化する。以前より変わったことと言えば、「専門家を配置」から「より高度な専門家を配置」にレベルアップしたことである。ということは「専門家を配置」という方法自体は決して間違っていないと信じているということか。

■絶対的権力は絶対的に腐敗するという真実

最近のさまざまな関係者の提案の中で、注目に値すると思われるのは、「虐待が疑われる家庭に外部の人が入り、その家庭に関わりながらチェック機能を果たしていく」というものではないか。私はいつも言っていることであるが、三大危険地帯がある。家（家庭）と学校と福祉施設。なぜかと言えば、この三者に関して、私たちは無条件に担い手を信頼している。親は子供を愛するだろう。先生は生徒を愛するだろう。施設職員は入所者を愛するだろう。

今それが見事に裏切られている。親は子供に横暴になり、先生は生徒に横暴になり、施設職員は入所者に横暴になる。

ローマ時代の哲学者が既にこのことを指摘していた。「絶対的な権力は、絶対的に腐敗する」。強者と弱者が、隔離された場で相対すれば、必ず強者は腐敗するのだ。だから政治の世界ではチェックアンドバランスの仕組みができていますが、どうしたことか、この三者には無関心である。事件は起こるべくして起きている。長年、親から虐待を受けていた子どもがこう言っていた。「家は、他人がいないから、親から虐待を受けたら逃げ場がない怖い場所だ」と。

チェック機能のあり方にはいろいろあっていい。学校では複数担任制が始まったが、教師同士がチェックアンドバランスの機能を果たしている。名古屋の児童相談所では緊急介入班を設けて、虐待があれば強引に家に入り込み、子どもを救い出す。老人施設では監視カメラが設置されているが、大事なことはモノではなくヒトの監視網がないと駄目ということだ。ある施設では、施設ボランティア

ィアがこの役を担っていた。施設職員よりもベテランのボランティアは、入所者にも職員にも信頼されていて、両者のつなげ役を果たしている。こういう人こそが本当のオンブズマンなのだ。そろそろ本格的な監視体制を作り上げる必要がある。

■児童関係者には専門知識よりも天性の資質が必要だ

私は以前、「社会問題解決のヒント」という冊子をまとめたが（このホームページにも掲載している）、そこに、問題解決のポイントになるキーワードを12個並べてある。その中から、児童虐待の解決につながるヒントになりそうなものをピックアップしてみよう。

前項で取り上げたのは、この中の「ひらく」である。組織（家庭・学校・福祉施設）をひらかせる必要があるということだ。

もう1つ大事なのが、「アマチュア」である。子どもの虐待事件では、教師、教育委員会、児童相談所の三者ともが、腰が引けている。本気で子どもを守ろうという気がないと言われても仕方がない。はっきり言えば、それではミスキャストなのだ。

こういう場合に求められるのは、なんとしても子どもを助けようという意欲であり、そのためには、閉じている家にも積極的に関わっていく資質だろう。それを備えているのは、地域で世話焼きさんと言われる人だ。児童問題では素人でも、今必要なのは専門的な知識ではなく、虐待を受けている子どもを助けたいという意志や、場合によっては問題を抱えている親自身にも関わっていける人間力であり、これは教科書で学べるものではなく、天性の資質としか言いようがない。そういう人物を発掘しなければならない。社会問題では必ず人材の問題が出てくる。関係者はかならず「専門家の配置」に固執をする。こればかりは絶対に引けない、といった姿勢である。

今の地域社会の作られ方自体が問題を生み、監視網ができない理由にもなっている。昔のように、家と家がくっつき、家庭同士のつながりが密接な所では、親が密かに虐待するということができにくい。こうした根本的な問題解決をめざさなければ、事件はなくなる。

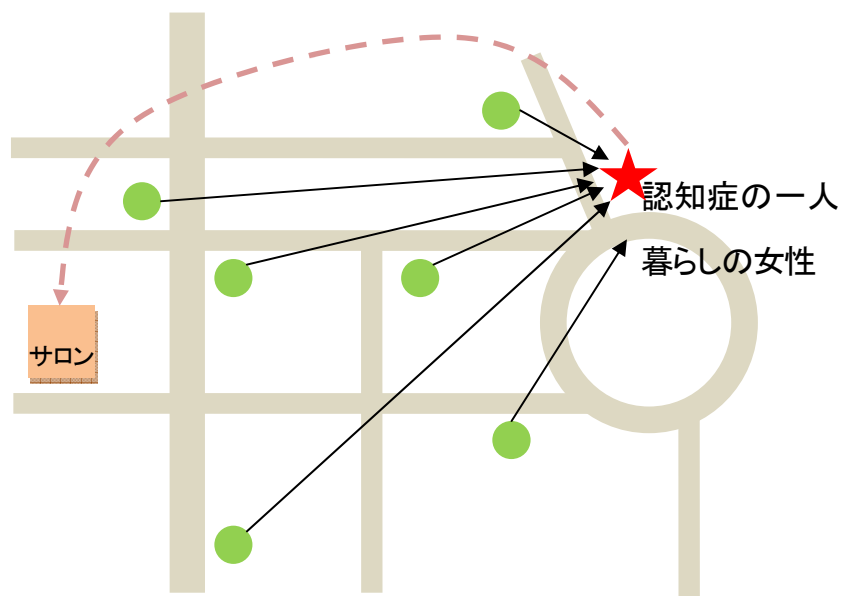
テーマ	家庭虐待	
社会問題解決の12のカギ	重要度	
(1)当事者の扱い方		
①当事者発	★★★	子どもの問題は子どもが考える
②個づくり（個の尊重）	★★	
③周縁へ（脇役にも注目）		
④フェアネス		
(2)問題の捉え方		
①遡る		
②ポジティブ（プラス思考）		
③統合		
(3)人材		
①アマチュア	★★★★★	専門家よりも素人の世話焼きさんを登用
②ひらく（開かれた組織）	★★★★★	問題を抱えた家庭に外部の人が入り、 関わっていく
(4)解決の環境づくり		
①絆	★★★	地域のふれあいの強化
②スロー	★★★★★	ご近所・向う三軒両隣の再生
③共生		

面倒をみているつもりが、みられていた

●一人暮らしの認知症の女性が自宅でサロンを開催。その動機は？

■サロンの二次会に顔を出してみると…

岡山県のある地区でふれあいサロンが開かれていた。ところが集会場は地区の西に偏っているから、参加者も西方の人が多い。そこで、東の方で別のサロンができていないかと調べたら、2か所で二次会が開かれていた。



そのうちの1か所が、一人暮らしの認知症の女性宅だった。「みんな、うちにおいでよ」と周りに誘いをかけた結果、数名が集まっている。

参加者の1人に参加の動機を尋ねたら、「見守りがてら」と言っていた。認知症の女性は地域活動の一環としてサロンを開いている「つもり」であり、集まった人たちは彼女の見守りをしている「つもり」なのだ。巧まざる「助けられ上手さん」だったと言うべきか。

なぜか一人暮らしの女性が90歳ぐらいになると始めるのが、自宅開放のサロンである。そして、集まっている人に動機を聞くと、やはり「見守りがてら」という答えが返ってくる。

■「助けて！」と言うには勇気が要る

超高齢社会に突入して、大げさに言えば地域は要援護者で溢れる時代に入りつつある。そうなる

と、福祉を考える場合も、受け手の側から考えていかねばならない面も出てくる。

要援護になると、誰かに助けを求めなければならない場面が増えてくる。これが難しいのだが、日本人は「頼まれたら助ける」という人が大半だから、要援護者自身が誰かに助けを求めるという行為は不可欠なのだ。そこで、私は「助けられ上手」という言葉を考え出した。この20～30年の間に、この言葉自体は普及したが、「助けて!」と言うこと自体、勇気が要るし、叫ぶ側にはプライドの危機が訪れる。

■プライドを潰さずに助けてもらう方法はないか？

もっとプライドを潰さずに済む助けられ方がないものかと考えてきたが、地域でマップ作りをすると、その事例に出会う。

例えば前述のように、一人暮らし高齢者が自宅でサロンを開き、「うちに来ない？」と誘いをかける。これ自体は地域ボランティア活動なのだが、実質的には、自分が見守ってもらうためでもある。むろん、はっきりそうは言わないが、そういう願いがあることは間違いない。ストレートに言えば、地域活動をするという表向きの顔をしながら、見守ってくれる人を集めることができる。集められる側も、そのことは承知している。これが住民の知恵なのだ。

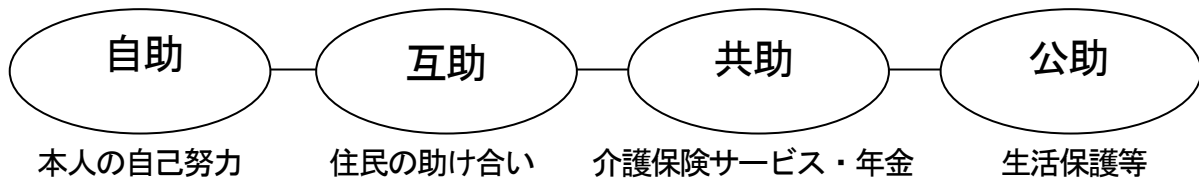
■助けられていることが表面から見えない仕組み

もっと発展していくと、見守りネットワークに一人暮らしの人も参加し、実際に見守り活動をする。その見守り活動の対象に自分も加えてもらう。さらに発展すると、見守りネットワークを自ら主宰し、メンバーを集めるプロデューサーの位置にいて、そのネットワークで自分も見守ってもらうといったケースもある。

それでいて、自分が福祉サービスの対象にされるということは、表面的には見えないようになっている。よく考えてみれば、これも助けられ上手の一種だとわかる。

■自助と互助を一体として考える新しい世界

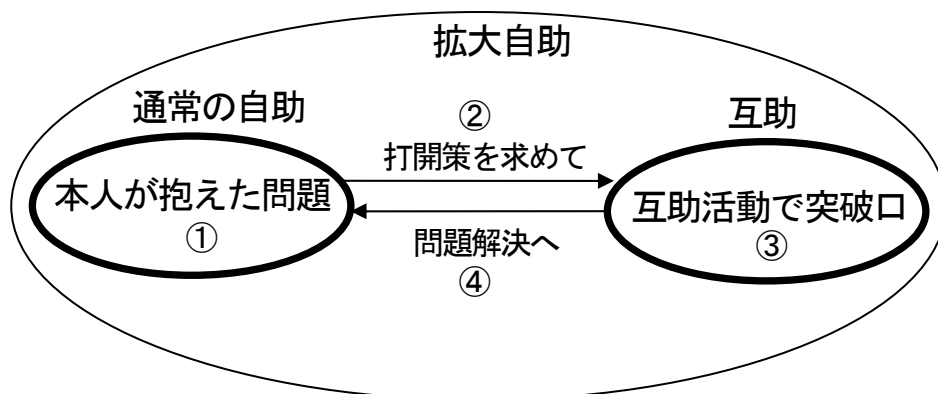
これまでは、どのようにして巧みに助けられるかという技術的なことばかりに関心を向けすぎていた。「助けられ」を考えることは、助けと助けられの対立関係の枠組みの中で福祉を考えることだ。この構図の世界に留まっている間は、これ以上の高みに達することはできない。思い切ってここから抜け出て、新しい世界に出て行かねばならない。



一人暮らし高齢者がサロンを開催するのは互助活動の一つ。とともに、本人の自助活動の一環だと言ってもいい。両者は一体であって、本人もこの中の自助と互助を分解して考えることはしないのだ。

■「助けて」と言わなくとも助けの手が差し出される

図を使って問題提起してみよう。まず①自助が、ある種の問題を抱えた。しかし自力ではどうしても解決できない。そこで②突破口を求めて、③互助の世界に踏み入り、自身の問題も併せて解決できそうな地域活動を考え、行動に移す。その結果、④自分の問題も解決される。



■自助・互助・共助を一体的に考える新しい福祉

問題は、互助はあきらめて自助で済まそうとした場合だ。市場サービスなり、共助型のサービス（介護保険等）で不足部分を補おうとした時である。

一応自己負担をしているので、そんなに卑屈になる必要はないのだが、特に昔気質の人などはそうもいかないようだ。デイサービスセンターのスタッフが、利用者の愚痴をたまたま聞いてしまった。「毎日毎日、『すまん、すまん』と言うのにくたびれた」と。

翌日、そのスタッフは自分の赤ちゃんを職場に連れて来て、「おばあちゃん、この子の面倒をみてね」とお願いしたら大喜び。以後所長の了解を得て、毎日連れてきているらしい。

■利用者参加型デイサービスを本気で考えなければ

それでも、サービスを受けるのが日常化すると、もはや助け合いという感覚を失ってしまう。「困ったことがあればサービスを利用すればいい」—こういうことが言えるのは、互助の本当の利点を知らないからだ。

こうなると、利用者参加型デイサービスを、本気で考えなければならない。参加を超えて、利用者互助型、もっと発展して利用者主役のデイサービスもだ。

今の福祉関係者は、自助と互助と共助をそれぞれ独立した概念と見て、まず自助、それがだめなら互助、それでもだめなら共助と、きっぱり割り切って考えるが、現実にはそう簡単には割り切れない。介護保険制度を利用するのだから、卑屈になる必要はないと言われても、人によっては互助的でないと受け入れにくいということがあるものなのだ。

■サービスが当事者にもたらすマイナス効果

自助を確保するために共助のサービスを利用する。しかしただサービスを受けるのではなく、それを互助的なサービスにしてしまう。その結果、高姿勢でも低姿勢でもなく、正姿勢に戻る。

今の福祉全般を見て、まだ改善点が残っているとしたら、この「サービス」という部分をどう本当の互助にするかということである。その点ではボランティアであろうと、介護保険サービスであろうと、公的サービスであろうと、変わりがないのだ。